

西園寺文庫所蔵『薰集類抄』翻刻と校異（下）

田 中 圭 子

薰集類抄下

和合時節

炮甲香

飾絹

合飾

合和 新付埋所

埋日數

和合時節

賀陽宮

正月十日作之

山田尼

春むめのはなさかり二三月秋蘭菊

のかうはしき八九月

煎甘葛

姚家 取白 新蜜一斤四了煎沫解即取和香

長寧公主 蜜去沫和

邠王家 以蜜合占唐香微く火煎

煎甘葛

春香

飾後斤定

和香次第

合春

諸香

(41ウ)

(41オ)

267 付埋所 岩 「埋所」無し

268 □ （虫損） 鶴 羣 神 沙

杏 承 岩 法 （頭書「承」）

269 取 鶴 焚れ 杏 岩 焚孔

270 邠王家 鶴 邠王家 音賀

杏 岩 邠王家 神 邠王家 上皇王

271 唐 神 威

272 杏 岩 ここに「去」有り

273 記 鶴 岩 羣 訖 杏 訖

274 整 鶴 整 神 整

275 稚 鶴 杏 誰 岩 誰 羣 雞

276 蜜 鶴 本ノミ 杏 岩 等

277 能程 神 能程ニ

278 未固 杏 岩 未レ固

賀陽宮 蜜能煎捨沐用之

公忠朝臣

以文武火煎記去沫整寒溫和雜香又曰

蜜能煎²⁸¹未固程²⁸²以綿²⁸³絞²⁸⁴可合之

白石英方云煮以陰陽鼎煎以文武火出於

草木為文火於金石為武火春夏鑄為陽

鼎秋冬鑄為陰鼎

或書云下猛火上以灰埋也下猛則武也

上埋則文也謂之文武火也

經信卿云非²⁸⁵多非微以之為文武火也以

火為文以猛火為武也仲卿公忠之末流也

若有所聞歟但非微者已離文非猛者亦

離武何以中火稱文武乎

師成卿云先以猛火煎後以微火煎謂

之文武火也仲卿小一條大將之孫也

定有所聞歟

雅忠朝臣勘文云文伏武之道也政理

和則武道不與故煎練之處以²⁸⁶燒為

文武火歟

²⁸⁷於刀反 東宮切韻云埋灰中令熱也唐

韻云伏埋²⁸⁸燒也去物漸熱也無焰火也

又云陰陽釜秋冬鑄為陰春夏鑄為

(42才)

(42ウ)

(43才)

279 以綿²⁸⁰鶴²⁸¹杏²⁸²岩²⁸³以テレ綿²⁸⁴テ

280 「本草也」有り²⁸¹羣²⁸²無し

281 鑄²⁸²神²⁸³鑄²⁸⁴

282 多²⁸³岩²⁸⁴多²⁸⁵羣²⁸⁶猛²⁸⁷

283 仲²⁸⁴鶴²⁸⁵杏²⁸⁶岩²⁸⁷羣²⁸⁸件²⁸⁹神²⁹⁰仲²⁹¹仲²⁹²

284 仲²⁸⁵鶴²⁸⁶杏²⁸⁷岩²⁸⁸羣²⁸⁹件²⁹⁰神²⁹¹仲²⁹²

285 小²⁸⁶羣²⁸⁷者²⁸⁸小²⁸⁹神²⁹⁰わ²⁹¹

286 聞²⁸⁷神²⁸⁸庚²⁸⁹

287 練²⁸⁸羣²⁸⁹煉²⁹⁰

288 處²⁸⁹羣²⁹⁰處²⁹¹神²⁹²度²⁹³

289 鶴²⁹⁰ここに頭書²⁹¹〔燒於刀反〕

290 燒²⁹¹岩²⁹²燒²⁹³

291 埋²⁹²神²⁹³埋²⁹⁴

292 燒²⁹³煨²⁹⁴杏²⁹⁵岩²⁹⁶燒²⁹⁷煨²⁹⁸

293 去²⁹⁴杏²⁹⁵云²⁹⁶岩²⁹⁷之²⁹⁸云

294 熱²⁹⁵鶴²⁹⁶焚²⁹⁷杏²⁹⁸岩²⁹⁹焚³⁰⁰神³⁰¹吳³⁰²

295 焰²⁹⁶神²⁹⁷焰²⁹⁸

296 為²⁹⁷鶴²⁹⁸力²⁹⁹岩³⁰⁰為³⁰¹

297 北²⁹⁸鶴²⁹⁹北³⁰⁰神³⁰¹北³⁰²

陽或随所出定陰陽以北方爲陰以南方

爲陽歟凡煮藥其釜覆蓋謂之陰

陽鼎居欬并覆蓋以之陰陽鼎

八条宮 凡蜜煎去沫唐蘇合等入蜜煎

八条大將 以甘葛入瓶子封口入湯三日許煎之如蜂蜜

隨時朝臣 和合蜜與千歲蔓汁混合用之甘葛也

國粹以蜜入土器中燒埋火居其上微火煎之沫立之
後去沫以指探蜜通寒濕欲冷也熱則失香云云

山田尼

蜜はかうはしけれとむしのいてくるとき

ありあまつらハよしかなくさからすさかくさ

からすねる蜜のことくかたからむを火よく

うつミてしろかねのものをして煎せよ火の

きハ三寸はかりもちあけよかなわをたて、

きえぬものからにふくてねるなりいれもの

のつらにつきたるをハしにかくれハいと

たるほとに煎せよかたまらぬさきに上て

さましてものにしたミいれてかひして

すこしつゝくみてかつくまめしてかたき

かたなるにつきもていけはよき

或説

あまつらを煎することはものしてかき

(44ウ)

(44才)

(43ウ)

298 凡煮藥其釜覆蓋謂之陰陽鼎如本

〔鶴〕 凡煮藥其釜覆蓋謂之陰陽鼎如本

〔杏岩〕 凡煮藥其釜覆蓋謂之陰陽鼎以下如本

〔羣〕 凡煮藥其釜覆蓋謂之陰鼎

299 鈺覆蓋以

〔鶴〕 鈺并覆蓋以 〔神〕 鈺并覆蓋以

〔杏岩〕 鈺并覆蓋以 〔羣〕 鈺謂

隨 〔鶴〕 隨 〔杏岩〕 隨

300 千歲蔓汁甘葛也 〔杏岩〕 千歲蔓汁

〔羣〕 千歲蔓汁

301 國粹上卷二 〔神〕 國粹

302 蜜 〔神〕 蜜

303 とむしのいてくる

〔羣〕 とむしのいてくる

〔神〕 とむしのいてくる

304 あまつら 〔杏岩〕 あまかつら

〔羣〕 あまつら

〔神〕 あまつら

306 かなくさからすさかくさ

〔羣〕 かなくさからすさかくさ

〔神〕 かなくさからすさかくさ

〔神〕 かなくさからすさかくさ

公忠朝臣

(45才)

320
いけ
杏
岩
いる
羣
いけ_行

先漬古酒經一宿割去肉膜冬大唐及土左
國經二宿云々炮炙塗蜜及黑黃于取○搗任用
隨時朝臣36

漬酒經一宿以清水洗和千歲薑汁滴灸待
朝搗用今試一度以千歲薑汁代蜜但推
尋其意依麼非好蓋相轉用乎30 36 37 38

國粹

擇厚深物漬美酒寒時經一宿溫時朝漬夕
出也漬拭不削刷矣唯触剝膜肉以蜜塗之
以帑籠炮乾亦塗蜜如此三度了取見其中
待黃脆折時取春之34 35 36 37 38

東三条院

漬好酒經一宿之後以刀上乃垢剝落重干
于離ウ30 31 32 33 34 35 36 37 38 炮39 スト知ル

四条大納言

塗甘葛煎若濃ハ水ニテ頗薄ク成テ可塗之
濃甘葛煎ヲ塗ハ甘葛煎テ早不被灸也30 31 32 33 34 35 36 37 38
只薄ク塗カ吉也

山田尼

よきさけにひとよひたしてきたなさと
ころなくよくはたけてあまつらの煎せぬ
を名なしのゆひしてぬりて火をよくおこし

（47ウ）

（47オ）

（46ウ）

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|--|--|---|--|---|--|---|--|--|--|---|--|--|--|
| 336 熬 <small>カ</small> 神 <small>カ</small> | 335 亦 <small>カ</small> 杏 <small>カ</small> 岩 <small>カ</small> 忽 <small>カ</small> 神 <small>カ</small> | 334 鶴 <small>カ</small> 杏 <small>カ</small> 岩 <small>カ</small> 羣 <small>カ</small> ここに「三」有り | 333 酒 <small>カ</small> 羣 <small>カ</small> 酢 <small>カ</small> | 332 杏 <small>カ</small> 岩 <small>カ</small> 羣 <small>カ</small> 鎗 <small>カ</small> 子 <small>カ</small> 神 <small>カ</small> 鎗 <small>カ</small> 子 <small>カ</small> | 331 甲 <small>カ</small> 香 <small>カ</small> 神 <small>カ</small> 甲 <small>カ</small> 香 <small>カ</small> | 330 炮 <small>カ</small> 杏 <small>カ</small> 炮 <small>カ</small> 岩 <small>カ</small> 、煙 <small>カ</small> ○神 <small>カ</small> ○炮 <small>カ</small> | 329 かなわ <small>カ</small> 神 <small>カ</small> かなわ <small>カ</small> | 328 うつみて <small>カ</small> 羣 <small>カ</small> うつミ <small>カ</small> て <small>カ</small> 神 <small>カ</small> うつみて <small>カ</small> | 327 ほとに煎す <small>カ</small> 神 <small>カ</small> ほとに煎す <small>カ</small> | 326 た、なはり <small>カ</small> 神 <small>カ</small> た、なはり <small>カ</small> | 325 やへた、み <small>カ</small> 羣 <small>カ</small> やへた、み <small>カ</small> | 324 やますけ <small>カ</small> 杏 <small>カ</small> や、ますけ <small>カ</small> | 323 あくれば <small>カ</small> 神 <small>カ</small> あくれば <small>カ</small> | 322 あまつら <small>カ</small> 神 <small>カ</small> あまつら <small>カ</small> | 321 よき <small>カ</small> 岩 <small>カ</small> よき <small>カ</small> 、神 <small>カ</small> よき <small>カ</small> |
|---|--|--|--|---|--|---|--|---|--|--|--|---|--|--|--|

てかきひろ³⁷¹けてはひかきう³⁷²つみてこの
めのこま³⁷³かなるにひろ³⁷⁴けいれて三日はかり
あふれあつき³⁷⁵はをしわりてあふるへし
こか³⁷⁶さぬものからよくこかね³⁷⁷いろにあふれ
うす³⁷⁸くてひろき³⁷⁹ハとくあふるあつきを
よくあふ³⁸⁰りたるもよし

又云

ひろくてうすきをよきにすあつきをも³⁷⁶
いふまつあちはひよくすみたるさけに³⁷⁷
ひたしてけふの午時にいれたらハあすの³⁷⁸
午時にとりいつへしものこしのかひかう土佐の³⁷⁹

くに、いてくるとは³⁰ふたよひたすへしかた
なしてうちのかたにつき³¹たるたなしといふ
ものをよく³²ハたくへしうらのいそすりハた、
ものなのとはさまりたらんをはたけていた
くはハたくましうらもうへもよくハたけ
きさけたるもよしといふ人もあり³³ざれとも
それはわるきなり³⁴さて水してよくあら
いて又³⁵と³⁶きにひたしてしハしおきて又
とりいて、水してよくあらふへした、し
すにひたすことはあまりの心しらひなり
さらねともあしくもあら³⁷ずさてよくのこひ

(48才)

(48ウ)

(49才)

339	338	337
同	爆	包
神	羣	杏
、同	曝	岩
	神	羣
	爆	色

340 蚤 鶴 炙 杏 炙 岩 炙 羣 炙 神 炙
341 一宿後 羣 一夜後

342 亦
杏
岩
忽
神
名

343 蚤 鶴 冬 杏 冬 岩 冬 羣 冬 神 冬

344 于令黑黃 **岩** 干黑黃 令 ○

345 仕用 鶴 仕由 杏 任用 岩 任由

羣
任用
神
任用

346 隨時 鶴 杏 岩 隨時 羣 隨時

347 千歲羹汁 鶴 千歲羹汁 歲本

杏岩羣
千系汁
神
千歲系汁
アマツラ

348 滴灸 鶴 滴灸 杏 岩 滴灸、シホリ 羣 滴灸

神
滴灸

349 千歲羹汁 鶴 杏 岩 千羹汁

50
其
鵲
甚
申
其

專
杏
浦
呂
專
(頁
誓
浦
專
專

39
4
轉致

神傳

ほしてこきかミをしきて火をよくきほに
 してうるへ／＼よくから／＼となるまでつ
 ねにかへしつゝたかさねてあふりてのちに
 せんしたるあまつらをぬりてあつくふくむま
 しきかみをこのうへにはりてハたによくどち
 つけてまつらをうへにてあふるへしうち
 をうへにてあふることほくほなるかたにいり
 たるあまつらをこほしとしてなりそのあま
 づらすこしかはかむのちにはうらをうへにて
 もあふるへしおしをふにしふねからぬ
 やはらかにおれてくるミすきはやかなるほ
 とにあふりてつくへしもししめりてつ
 かれすふるはれすは火をよくほとにてあ
 ふりかはらけつらふるふへしある説にはせ
 んしたるあまつらしてあふるハあふる
 まゝにこかれてあしたゝせんせぬをぬりてあふる
 へしとそいふをなましあまつらハとみにあふ
 りかはらけられすいそかむときハせんしたる
 をぬるへきにやあらむあふるときにいえつ
 きてあるをはとりかへさむとてハ火をあつ
 きほとにてすこしあふりてはなつへし
 おほよそあまつらのおほくつきたるかきき

(51オ)

(50ウ)

(50オ)

(49ウ)

- 352 矣鶴 矣神
 353 刺鶴 杏岩 割神
 354 亦杏岩 忽神
 355 蜜 如本 杏岩 羣神 蜜
 356 脆鶴 昭岩 脂 如本 杏岩 羣神 蜜
 357 疾鶴 杏岩 夜 羣宿神 疾
 358 上乃鶴 岩上テ 杏上二神 上乃
 359 垢ヲ 神 垢ヲ
 360 刺鶴 杏岩 割 羣 削神
 361 予鶴 岩 羣 干神
 362 離ウ 鶴 推ウ 杏 離ウ
 363 炮ヌト 杏岩 炮ヌト 神 炮ヌト
 364 水ニテ 鶴 水テ 杏 岩 水ヲ 神 水ニテ
 365 成テ 羣 成シ 神 成テ
 366 塗ハ 羣 塗 神 塗ハ
 367 煎テ 鶴 羣 神 煎浦テ 杏 岩 煎浦ヲ
 368 冬 鶴 冬 杏 冬 岩 冬 羣 冬 神 冬
 369 ひ 神 丸
 370 はたけて 神 はたけて

なり

春香

邠王家

裏衣香方六種各別搗為散和合唯蘇合⁴⁶

唐以手按碎和亦好

案之雖梅花烏方可准知歟

姚家

零陵香乾曝淨打却⁴⁶搗甘松且乾曝去塵霍

香亦同此外餘者盡搗可即入袋 云云

公忠朝臣

薰陸甘松⁴⁶漸春 凡春香替時鐵臼ヲ可能拭

大和常生

十五歲許ノ女ノ粉張乃衣ヲ着シテ春ムニ其粉不

落ル程ニ可春

案之微、可春歟

國鑄

可傳諸方說細搗 云云

四条大納言

荒キハ其香ト聞也細搗篩ヒタル 只薰物乃善惡

トコソ聞由水沈丁子ト聞ユル事ハ無し然則篩ハ猶二重

許ニテ可用

知章朝臣

(51ウ)

(52オ)

(52ウ)

371 ひろけて 神 ひろけて

372 はひかき 岩 はひよに (頭書「籠」)

373 き 鶴

374 と 鶴 神

375 あふらる 神 あふらる

376 を 鶴 杏 岩 と 羣 阿

377 よく 岩

378 さけ 神

379 かひかう 神 かひかう

380 ふたよひたす 神 ふたよひたす

381 たなし 鶴 杏 たなしこ 岩 たなしこ

382 はたく 鶴 はたく 杏 はたく

383 岩 たく 神 はたく

384 神 をはたけて 杏 岩 をはたけて

385 うら 羣 うち

386 いたくはたくまし

387 鶴 杏 いたくはたくまし

388 岩 いたくはたくまし

389 羣 いたくはたくまし

390 神 いたくはたくまし

甲香塗蜜^ラ炮^テ折見ニ中きはやかになりて
さわらかなる時可春

山田尼

甲香ハ炙ツ、可春^シねちけたれは^ニ

宇治関白

麝香ハ鐵小鉢同鍍シテ研之

篩絹

公忠朝臣

以^ニ彦羅篩

國持

所傳請方黒方細搗以^ニ絳篩之

四条大納言

篩擣二重ニテ可細篩也以細為勝

知章朝臣

以^ニ絳可篩之

山田尼

ふるひハかとりの小葉をはりてはしめハゆすりてのち
はやおらつ、すれあらくすれハあらしあまり細かなるハ
みめハよくてたくをりにふくれていとくかへしかに
なりあらくしたるハみめわろくてはふれかましよき
ほとなるそよきくさくふるひあつめてひとつに
いる、おりかうはしきものはてにいるちむをかき

（54オ）

（53ウ）

（53オ）

386 ハたけ^ニ神^ハハたけ

387 ありされとも^ニ鶴^ニ羣^ハありされとも

杏^ニ岩^ハあり、されとも

神^ハありされとも

388 わろき^ニ神^ハわろき

389 あらい^ニ鶴^ハ杏^ニ岩^ハ羣^ハあらい

神^ハあらい

390 ときす^ニ羣^ハとき酢^ニ神^ハときす

391 ひ^ニ神^ハひ

392 とん^ニ杏^ハ岩^ハと心^ニ羣^ハとし^ニ神^ハとし

393 のこひ^ニ神^ハのこひ

394 こき^ニ羣^ハ籠^ニに^ニ神^ハこに

395 よくきほとに^ニ鶴^ハ岩^ハ羣^ハ神^ハよきほとに

396 かへし^ニ神^ハかへし

397 たかさねて^ニ鶴^ハこかさねて

杏^ニ岩^ハこかさねて^ニ羣^ハまたかさねて

神^ハ○たかさねて

398 せんし^ニ神^ハせんし

399 ぬりて^ニ神^ハぬりて

400 ふくむましき^ニ杏^ハ岩^ハふくむ、しき

羣^ハふくらむましき

滋宰相

先和沈丁子次合甲香次合白檀最後和麝香

云々 尚自可及多爲令快和合也

染殿宮

諸香合蜜之後可和麝也 此說可秘云云

公忠朝臣

沈ヲ母ニテ沈丁薫白ノアハヒニ麝香ハ合次甲香

又說蜜合了之上麝香振懸云々 蜜合了以

手ニキル也加手成之普一々振合爲能

八条大將 承和秘方同之

沈甲麝薫白丁

朱雀院

沈丁甲薫麝

東三條院

沈甲白薫丁麝

四條大納言

合香次第只以両数少物先入也又以両数均對云々

合也但麝香ハ最後一合之

小一条皇后

先沈丁子ヲ合次甲香ヲ合次白檀ヲ合終ニ麝

香薫陸ヲ合テ一度ニ合スト云リ少ヨリ多ニ可及

(57オ)

(56ウ)

(56オ)

419 つかれす 神 つかれす

420 ふるはれすは

神 はれすは

421 よく 鶴 羣 神 よき

422 あふり 神 あふり

423 かはらけ 羣 かはらけ 神 かはらけ

424 つら 鶴 羣 つ、 杳 つ、 岩（無し）

神 つッ

425 せんしたる 神 せんしたる

426 あまつら 神 あまつら

427 あふる 神 あふる

428 こかれて 神 こがれて

429 あし 神 あし

430 た、 神 た、

431 せんせぬ 杳 せんをぬ 神 せんせぬ

432 あふる 神 あふる

433 とぞ 神 とぞ

434 いふ 神 いふを

435 なまし 羣 なましき 神 なまし

436 かはらけ 羣 かはらけ 神 かはらけ

437 られす 杳 岩 られす、 神 られす

438 せんし 神 せんし

快⁵⁴²ヲ為合也

合和

和以⁵⁴¹混⁵⁴²為好

混⁵⁴¹ 唐韻三弥忍反弥賓反滅也又動也

知章朝臣口傳云以指推合香⁵⁴⁷ニ指⁵⁴⁸乃⁵⁴⁹皴⁵⁵⁰乃⁵⁵¹
文乃付⁵⁵²程⁵⁵³ヲ混⁵⁵⁴々ノ程⁵⁵⁵ト謂也

國粹

和蜜程頗欲堅埋則自有溫氣云云

大僧都寛教

春之丁子夏秋之沈冬薰陸隨季三朱許可加歟

山田尼

先⁵⁵⁶ツめをきりて手をあらひてつかミあはせ⁵⁵⁷

よこれはことねり常生か説なりてのあか
いとともちぬ人もあり又云いまたか
たまらぬによくさましてものにしたみ
いれてかひしてすこしつゝくみてかつく

まめしてかたきかたなるにつききもていけ
はよき煎したるものなからいるれば
たりくるほとにいれすすなり

或説

すゝりのはこのふたなどにあつくうるは⁵⁵⁸
しきかみをしきてそれに香をしきたいに

(58ウ)

(58オ)

(57ウ)

439 あらむ 鶴 あらん 杏岩 あらん、

神 あらむ

440 いえ 杏岩 ハ、え 羣 にえ

神 いえ

441 をは 神 をは

442 神 左記の書き入れ有り

はなつへし
(ニエツキタルヲハナツナリ

443 たる 神 たる

444 卯王家 鶴 卯王家

羣 卯王家 神 卯王家

445 裏衣香 鶴 裏衣香 羣 裏衣香

446 麝唐 杏岩 麝唐、羣 兎唐 神 麝唐

447 亦 鶴 之 神 互

448 鳥方 神 鳥方

449 姚家 神 姚家

450 亦 神 互

451 外 鶴 杏岩 列 神 列

452 生 杏岩 羣 生 神 生

453 許ノ 神 許ノ 許歟

合春

姚家

諸香調和了入鐵臼搗五百杵

公忠朝臣

合和良久研黏搗三千許杵

隨時朝卜

和蜜投鐵臼中搗數以多為好

いれてまつひとくさいれてははまくりの
かひなとしてよくたひくかきかへしつ、
あまねくあはせて又いれくよくかき
あはせてすこしあきふるひしてふた
たひふるひあはせてあまつらにはあはす
へしあはせたるおりはかうはしともおほ
えす丁子などのかはやきをかきなれたる
ほとなるへし廿日ハかりわすれてとりいて、
かくにそかうはしきものなるなつあはす
るハかたきよししるになるなりふゆハしる
なれともまたのひハかたまりぬくさくの
ものをひにたきたてかくにくさく
か、ゆるをはいる、かすにすこしきらさ
すかうはしきものをほうのことくに
いるへしくさき物のおほくいるハ甲香也

（60オ）

（59ウ）

（59オ）

- 454 張乃鶴張ノ杏岩張ノ神張ノ
455 諸岩諸（頭書「諸」）神諸
456 搗節ヒタル鶴杏岩神搗節ヒタルハ
457 乃鶴ヲ杏岩ヲ神ヲ
458 由水鶴ゆれ杏由レ岩羣由札
神由本
459 無し鶴杏岩無神無し
460 炙ツ、可春シ杏岩炙ツ、可レ春シ之
神炙ツ、可▲春▲シ
461 杏岩ここに「之」有り
462 杏岩ここに「本」有り
463 鶴杏岩羣ここに「又云金臼杵ハ
香替コトニ清掃ヘ」有り
464 鐵小鉢岩鐵ノ小鉢神鐵小鉢
465 岩ここに左記の二行有り
、二条関白麝香、委和入、鎚之
466 以度羅節杏岩以二庶羅ヲ節、
羣以庶羅節神以庶羅節
467 請杏諸岩請
468 以絳節之杏岩以絳ヲ節レ之
羣以絳節之神以絳節之

國聘

先以諸香入大革篋蓋和蜜能黏合了⁶⁰⁷

入鐵臼搗千杵

致忠朝臣 東三條院同之

合香搗 ⁶⁰⁸二千杵

知章朝臣

千度之内可春之

山田尼

あはせつきのおりはかなうすきねよくあらふ⁶⁰⁹

へし四両合にハ三千度二両合にハ千五⁶¹⁰

百度一両合にハ千度すくなきはとくつ⁶¹¹

かるれハかすをおとすなりしろきこはり⁶¹²

きたるにてはこいりてあしのりはりき⁶¹³

たらん人のつくへき也⁶¹⁴

埋日數 付埋所

長寧公主

埋三日

姚家

埋七日

極要方

盛白瓷中掘地三尺以上用水邊之地得朝陽

埋之卅日

(61ウ)

(61オ)

(60ウ)

469 可細篩也以細為勝

杏 可^二細^一篩也、以^レ細為^レ勝、

岩 可細篩也、以^レ細為^レ勝、

470 以^レ細可篩之

杏岩 以^レ細可篩^レ之、

羣 以^レ細可篩之 神 以^レ可篩之

471 かとり 神 かとり

472 よき 鶴 小葉 杏 小葉 岩 小葉

神 小葉

473 はりて 杏岩 はりて、神 はりて、

474 やおら 鶴 杏岩 羣 やをら 神 やおら

475 つ、 神

476 すれハ 鶴 杏岩 すれハ 神 ○すれハ

477 細かなる 鶴 杏岩 こまかなる

神 細りひる

478 みめハ 鶴 杏岩 みめハ 羣 みめ

神 見目ハ

479 たく 神

480 みめ 鶴 杏岩 みめハ

481 わろく 杏岩 わろけ

482 はふれかまし 杏岩 はふれかまし、

羣 ハふれかまし 神 はふれかまし、

洛陽薰衣香方

入瓷器埋水邊陽氣地深八寸七箇日之後
出用之

承和百步香方

盛瓷瓶中埋經三七日取燒百步外聞香

同御時

被埋右近陣御溝邊地後代相傳不變其處
云々或記云右近陣御溝⁸²⁸上壇上云々

賀陽宮

用唐瓷器掘露地深三尺許埋之

八条式部卿宮

一宿埋馬矢下件方傳得陽成院書云々

公忠朝臣

黒方侍從春秋五日夏三日冬七日埋之

梅樹下

致忠朝臣

合香⁸²⁹後物ニ入⁸³⁰花乃木ノ下土中に高埋之

知章朝臣

五葉ノ松下ニ可埋春秋七日夏五日冬十日

山田尼

茶碗のつほもしハつきなとにいれてふたよく
お、いてそくひしてかみおしてよくみつ

(63ウ)

(63オ)

(62ウ)

(62オ)

- 483 なるそ **神** なす^とち^て
484 くさく **神** くさく^{くさく}
485 かうはしき **神** かうはしき^か
486 はて **神** はて^は
487 いる **神** いる^い
488 ちむ **羣** ちむ **神** ちむ^{ちむ}
489 き **岩** ^き
490 に **杏岩** を^を
491 き **岩** ^き
492 ませて **神** ませて^ま
493 又 **杏岩** み^み
494 あはせつき **神** あはせつき^あ
495 つき **神** つき^{つき}
496 せよ **羣** よせ^よ
497 あかきところ **羣** あかき所^あ
498 つき **神** ^{つき}
499 かならず **神** かならず^{かな}
500 ふくれ **岩** ふくれ^ふ
501 おるかみ **鶴** **杏岩** **羣** おちかみ^お

諸香

いるましく封して梅樹のもとにうつむ
へしそれあめなといりてなかる、もあし
かりぬへし花の木のしたのつちをもの
にかきいれてうつみたるいとよし又水の
ほとりみちのつしむまのやのなかにももの
にしたかひてうつむへしあるいは十日
もしハ廿日なとうつめくろほう梅花などに
木のしたにうつみて春秋は五日夏ハ
三日冬ハ七日ありてとるへしつちをほる
こと二尺許なり

沈

證類云置水中則沈故曰沈香次不沈者曰
淺香似雞骨為雞骨香似馬蹄為馬蹄
香枝條細實為青桂云々

或書曰此木出日南欲取當先斫樹著地積外
皮自朽爛其心至堅者置水則沈名沈香其
次在心底之間不甚堅之置水不沈不浮與水
平者名曰淺香其最小者曰麝香葉
似冬青樹形崇竦

ちむのかうハしきひとつはハちすのかす二ハ
きくのはなかするあくけれとよしう
しの矢のかするいとあしむけのをとりは

(65オ)

(64ウ)

(64オ)

- 502 な 鶴 杏 岩 ひ
503 り 杏 れ
504 ふるい 鶴 杏 岩 羣 ふるひ 神 ふるひ
505 神 鶴 杏 岩 打
506 神 に左記の書き入れ有り
八丈類ヲ張ル
貞云云 鶴 杏 岩 打
507 乃 整懸両分之間
鶴 杏 岩 了 (一) 整懸両分之間
(※括弧内 岩)
羣 可 整懸両分之間
神 可 整懸両分之間
508 帝 岩 杏 帝 羣 紙
509 異 杏 岩 畏
510 各 鶴 杏 岩 名
511 ヲ 鶴 テ 岩 ニテ
512 置 斤 盤 鶴 置 斤 盤 岩 置 二 斤 盤 ニテ
神 置 二 斤 盤
513 仲 鶴 杏 岩 羣 件 神 仲
514 帝 ノ 鶴 帝 神 帝
515 羣 帝 鶴 帝 神 帝
516 紙 ノ 鶴 紙 杏 岩 紙 之
羣 帝 神 紙

造沈香法

先取香稻米斗以六月上午日淨洗合炊入女菊六升和合之入水六升着一新瓶（中口封）

わらあくたのかすひとつ沈にもかた／＼
かうはしきくさきかたあるをよくとりま
はしつ、火にたきてみてよきかたをわり
をれ沈のわろき（ハ）いとあしきなりくち
たるところなとハたけすて、つくへし
沈ハくろくおもきをよきにす又くろくおも
けれともわろきありすこしたきて心みる
へしいるへきかすにいま一二両許くはへ
てつくへしかはのやうなるもの又むしの
すのやうにてちりはみたるものまし
りたるをよくゑりてかたなしてこまかに
わりくたきてつくへしいとよきはしる
めきいミあひてよくもつかれすさらは
わろき沈をすこしくはへてつくへし
かなうすにふたをおほひてやをらつく
へしふるふにもやをらふるふへしすこ
しつ、ふるひてあまたたひつくへしま
つふるひたるをよきにす

（66ウ）

（66オ）

（65ウ）

- 517 畔ハ鶴（杏）岩（躰）躰ハ羣（躰）神（時）時ハ
518 羣ノ鶴（羣）羣ノ杏（岩）羣ノ羣（羣）羣ノ神（羣）
519 中ニ神中ニ
520 如紙ナル岩（如）紙（神）如紙ナル
521 如彼ノ帛也鶴（如）如彼ノ帛也
522 羣（如）如彼ノ紙也神（如）如彼ノ帛也
523 散（神）散
524 鹿（杏）羣（鹿）鹿（岩）鹿
525 日鶴四
526 鹿（杏）羣（鹿）鹿（岩）鹿
527 以縑飾之
528 羣（以）以縑飾之、岩（以）以縑飾之、
任各両數斤定神（任）任各両數斤定
529 神（こ）こに左記の書き入れ有り
貞丈按香具ヲ和合スルニ其次第アリ先
後ノ次第二依テ（改行）成劑ノ後芬芳ヲ
氣ニ異ナルフ有ヘシ譬ハ砂糖ト酒ト合
（改行）スルニ砂糖ヲ先ニシテ酒ヲ後ニ
スレハ味苦シ酒ヲ先ニ（改行）シテ砂糖
ヲ後ニスレハ味甘シ先後ニ依テ味異ナル
カ如シ

閑遇⁷⁰⁸三其限⁷⁰⁹浸取其汁⁷¹⁰酢也⁷¹¹ 以粟⁷¹²二升熬合黑色

即取入又作如前法也必至三度可用之然後⁷¹³ 生絹⁷¹⁴裏縛酢中⁷¹⁵燂而用之⁷¹⁶

取青桐木沈削去泥土令淨隨多少着其酢

封閉瓶口埋土中不可令知其日可換至

三度其後出青桐曝干了者亦別取新瓶

隨木多少蜂蜜淹瓶中隨木厚薄可用

蜜成三周或七周必成上品沈香也

生師口傳

香稻⁷¹⁷ 和名⁷¹⁸ 女菊⁷¹⁹ 過三其限⁷²⁰ 過三⁷²¹ 放栗⁷²²

用伏⁷²³ 淹栗⁷²⁴ 期⁷²⁵ 必至三度⁷²⁶ 作酢以初酢汁作之又以其

久栗⁷²⁷ 淹栗⁷²⁸ 期⁷²⁹ 必至三度⁷³⁰ 汁重作如此至三度之後用之

青桐木⁷³¹ 葉體如青桐但葉邊花形深入耳不花不實不高大但

心至堅者及節目⁷³² 埋土中⁷³³ 過瓶口上丈⁷³⁴ 至期日⁷³⁵ 其期也

黑堅者為尤佳⁷³⁶ 埋土中⁷³⁷ 過瓶口上丈⁷³⁸ 至期日⁷³⁹ 其期也

棧汁至三度⁷⁴⁰ 九十日一度棧⁷⁴¹ 經用出木⁷⁴² 以紙數籠盛青桐又

隨木厚薄⁷⁴³ 用蜜飲⁷⁴⁴ 不可令知⁷⁴⁵ 不令人知⁷⁴⁶ 其處所

又法

楓香水⁷⁴⁷ 一斤 沈香⁷⁴⁸ 一兩 白檀⁷⁴⁹ 一兩 藿香⁷⁵⁰ 一兩

梨蘆根⁷⁵¹ 一兩 香稻米酢⁷⁵² 三升 蓴汁⁷⁵³ 二升一合

(67ウ)

(67オ)

530 和合次第 (はスペース)

神 鶴 杏 岩 羣 (スペース無し)

神 ○ 和合次第

531 十 鶴 杏 岩 羣 丁 神

532 合 神

533 可 否 少 可 岩 少 可

534 沈 鶴 羣 次 杏 岩 次 二

535 ハ 羣 (無し)

536 杏 岩 ここに「ヲ」有り

537 蕉 杏 岩 (無し)

538 云々 鶴 (對) ニ 杏 岩 ミ (對)、

羣 對 神 云云

539 杏 岩 ここに「二」有り

540 ニ 羣 (無し)

541 合 テ 羣 (無し)

542 快 神 快

543 混、岩 混 神 混

544 混 杏 岩 混 神 混

545 三 鶴 杏 岩 羣 云 神

546 減 神 減

547 以 指 古 (欠) 鶴 岩 以 指 杏 以 指

神 以 指

カタクソノ出水也
鐵醬一升五合已上用藥并但大豆汁濃煮加淹之

右一瓶淨淹楓香水切以乍七種其入之口封閉土中埋之百日以來流水五升煎減四升入酢少之又道入一瓶以土封閉經三七日取出曝干而後隨木厚薄蜜中淹之若日取出曝三周若五周若七周即成上品沈香也

三七日也廿一日 曝干 同上 蜜中淹欲蜜多過 楓香木

葉體等例但願 蕁汁 搗絞 鐵醬 以塩盛釜若鼎埋葉邊有花形 取之 土中其上煖火若

埋竈下欲常熱也經一計處取出見之皆悉朽損如塊形既破即取入水令啗塩氣如此數度常様水令告塩

氣取管者無塩氣即止欲任用即春歸若乍本體淹用也與大豆汁平升法而和合云也

右二方唐僧長秀所秘藏也以方造進公宗之沈香其香甚好天曆十一年三月廿五日傳承之耳

丁子

雷公炮炙論云丁子有雄雌雄顆小雌顆大似櫻漿

核方中多使雌力大故膏煎中用雄若欲使雄

湏去丁蓋子くくく發人皆瘡也

試丁子法以齒嚙有音辛物是為上不然者

朽古者也

丁子乃えたいとわるしおほきにてしと

（69オ）

（68ウ）

（68オ）

548 推合香ニ 〔杏岩〕 推合香、神推合香ニ

549 指乃 〔鶴指〕 〔杏指〕 〔岩指〕

〔神指〕

550 シハ〔杏岩〕羣（無し）

551 皴乃 〔鶴皴〕 〔杏皴〕

〔神〕 〔皴〕 〔岩皴〕

552 文乃 〔鶴文〕 〔杏文〕 〔岩文〕 〔神文〕

553 程乃 〔杏岩〕 〔程〕 〔神程〕

554 浪々ノ 〔鶴浪〕 〔杏浪〕

〔岩浪〕 〔羣浪〕 〔神浪〕

555 つめ 〔岩つめ〕

556 手 〔鶴〕、（て） 〔杏〕、こ 〔岩〕、こ

557 せ 〔岩せ〕

558 ことねり 〔神ことねり〕

559 常生 〔神常生〕

560 云 〔杏岩〕 云、〔神云〕

561 さまして 〔鶴さして〕

562 かひ

〔神〕

（か）
（具ニテモアルヘシ）

563 め 〔羣め〕

564 つき 〔神つき〕

やかなるをよきにすふるくなりたるものはにてしるつかひたるはからくて口にくゝミみるにからくていとかうはし花といひてまるなるものとくきとてくろみたるものとハよきなりしるミてもの、すちのやうなる物ましりたるわろしえりすつへきなりこれもやをらつきてまつふるはれたらむをよきにすへしよきハさひたるやうにそある

白檀

内典云梅檀白謂之白檀

白檀はかたくてきなるをよきにすわかき木ハやはらかにてからくそあるうはかは少しけつりすて、つくへし

薰陸

一名膠香 一名白乳 已上二名出兼名見

本草云微温主療風水毒腫去惡氣伏尸

其形如白膠出天竺單于二國一名乳頭香

一名滴乳香 一名膠香 一名白乳香 一名雲華

一名沈油

如本くろくはにたるものおほかりよくみしるへしわろきは乳頭といひてしろきものまし

(69ウ)

(70オ)

(70ウ)

565 け^ろ ^ろ ^ろ

566 もの ^器 ^器

567 すゝり ^す ^す

568 は ^は ^は ^は ^は

569 かみ ^か ^か ^か ^か

570 したい ^{たい} ^{たい} ^{たい} ^{たい}

571 ひとくさ ^く ^く ^く ^く

572 はまくり ^り ^り ^り ^り

573 たひく ^く ^く ^く ^く

574 かき ^き ^き ^き ^き

575 あはせて ^て ^て ^て ^て

576 あまつら ^ら ^ら ^ら ^ら

577 かうはし ^し ^し ^し ^し

578 神 ^{しん} ^{しん} ^{しん} ^{しん}

579 おほえす ^す ^す ^す ^す

580 かは ^は ^は ^は ^は

581 き ^き ^き ^き ^き

582 かき ^き ^き ^き ^き

583 かく ^く ^く ^く ^く

584 そ ^そ ^そ ^そ ^そ

麝香

りたるよきはひかりき⁷⁶ハみてらふいろに
そあるくろミたるものやいしやなとまし
りたるをえりてすて、つくへし

雷公炮炙論云麝香多有偽者不如用

其香有三等一者名遺香是⁸⁰産子⁸⁰脐間

満タリ其⁸⁰産自於石上用蹄尖彈踏⁸⁰ヲ落

者落處一黑草木不生並⁸⁰焦⁸⁰黃人若

得此香價與明珠同也二名臍香採得

其堪用三名心結香被大獸驚心破了

因⁸⁰玃狂走雜諸群中遂亂投水被人收

得⁸⁰擊破⁸⁰見心⁸⁰流在脾上結作一大乾血塊可⁸⁰辟

山澗早聞之香是香中之次也凡使麝香並

用⁸⁰當子⁸⁰日開之不用⁸⁰苦⁸⁰納⁸⁰研⁸⁰用云⁸⁰

さかうハくしりたるにはひしれたるやう

なるハわろしくしりあつめてかはや毛など

のましりたるをよくえりて茶碗のつき

などにいれていし⁸⁰のすりききなくハやな

きのきのかれたるしてすりくたきてふ

るひて香ともみなあはせふるひてうへに

かきまする人もありされともことものとも

あまつらにひちくりてすこしつつきて

（72オ）

（71ウ）

（71オ）

- 585 なつ⁸⁰神⁸⁰なつ
586 する⁸⁰神⁸⁰する
587 なり⁸⁰羣⁸⁰也
588 ふゆ⁸⁰神⁸⁰ふゆ
589 また⁸⁰羣⁸⁰又⁸⁰神⁸⁰また
590 ひ⁸⁰羣⁸⁰日⁸⁰神⁸⁰ひ
591 くさく⁸⁰神⁸⁰くさく
592 たき⁸⁰岩⁸⁰にき
593 くさく⁸⁰神⁸⁰くさく
594 ゆる⁸⁰羣⁸⁰る、
595 いる⁸⁰、神⁸⁰いるく
596 かす⁸⁰神⁸⁰かす
597 きら⁸⁰鶴⁸⁰杏⁸⁰岩⁸⁰羣⁸⁰たら⁸⁰神⁸⁰さく
598 す⁸⁰鶴⁸⁰れ⁸⁰杏⁸⁰れ⁸⁰岩⁸⁰れ⁸⁰羣⁸⁰れ⁸⁰神⁸⁰す
599 をは⁸⁰神⁸⁰をは
600 くさき⁸⁰神⁸⁰くさき
601 物の⁸⁰羣⁸⁰もの、
602 也⁸⁰鶴⁸⁰杏⁸⁰岩⁸⁰なり
603 黏⁸⁰搗⁸⁰杏⁸⁰黏⁸⁰搗⁸⁰、岩⁸⁰黏⁸⁰、持⁸⁰神⁸⁰黏⁸⁰搗⁸⁰
604 汗⁸⁰杵⁸⁰鶴⁸⁰杏⁸⁰岩⁸⁰羣⁸⁰許⁸⁰杵⁸⁰神⁸⁰汗⁸⁰杵⁸⁰
605 朝⁸⁰ト⁸⁰鶴⁸⁰羣⁸⁰朝⁸⁰臣⁸⁰杏⁸⁰岩⁸⁰――
606 草⁸⁰鶴⁸⁰杏⁸⁰岩⁸⁰草⁸⁰羣⁸⁰神⁸⁰草⁸⁰
607 黏⁸⁰神⁸⁰

のちにちいさくひききりつゝ、まさなきた
とひなれ。もちゐとてくふものゝ、あれに
さすやうにさしあつめておしまろかして
のちにつきあはすへしいたくつきあらか
すれはかうすといふ香なきさかうをは
水にひたして久しからすしてくちな

はのかはをもちてまさつゝ、みてきよき
つちをはらひてさかうをおきてそのうへに

ちいさき茶碗をうつふせてところゝに
火をきてひさしからすしてとりすてゝ、

すなはちあたゝかなるわたにつゝ、ミてこれ
をおさむればかをます

ねちけたれ共くろほうはさかういれすゝめる
いといとよし侍従はよしとおほくいれたるい
れたるハなかゝあし

麝糖香

本草云微温其樹似橘矣煎枝葉為香

似糖而黑去伏尸病出交廣以南又出晉

安寧州真淳者難得多以其皮及拓佐

矣唯輕者為佳

せむたうはかたいしほのいろにてそのしほの
かはのやうにてうすひらにそあるまつ

(73ウ)

(73オ)

(72ウ)

608 合香搗二千杵 鶴杏岩 合香搗三千杵

609 かなうす 神 かなうす

610 きね 神 かね

611 とく 鶴 くとく 杏 よく

612 つかるれハ 神 につかるれハ

613 かす 神 かつ

614 なり 岩 かり、

615 しろき 岩 しろき。 羣 白き 神 しろき

616 こはり 神 こはり

617 きたる 神 きたる

618 こ 神 こ

619 いりて 神 いりて

620 あし 神 あし

621 のりはり 神 のりはり

622 きたらん 神 きたらん

623 つく 神 つく

624 後 岩 後

625 溝 神 溝

626 麝 鶴 杏 岩 羣 羣 麝 神 麝

送此法不言其術也云々

甘松

其艸種く也或如茹安草又如蒿筋又苗豆

或本列
或本無此字

出和香方本草云味甘温无毒主惡氣平

心腹脹滿令人身香叢生葉細出姑臧梵

云那羅駄

このかうはねをゑりすててつちなとましり
たるをハとりすて、やをらつくへしあかみ
てすきたるハわかくさはしろくてかは
らけたちたるそよかりける

雞香

證類云令人身香療齩齒煮汁含之

本草云其樹葉似栗花如梅花子似棗

核此雌樹也雄樹者花不實採花釀之以

成香出崑崙及交愛以南

このかうは丁子のふしなりからあはとい
ふもの、やうなり

藿香

南方草木物状曰六月採曝之及芬芳

可以着衣服中長秀曰八月採灑酒于納

亦早日採之乍露于二朝入帟袋不使風

氣通

(77オ)

(76ウ)

(76オ)

(75ウ)

641 證類云 **杏岩羣** 證類云、**神** 本草也云

642 淺香 **杏岩** 淺香、**神** 淺香

643 斫鶴研神 研

644 著 **杏岩** 着神 香

645 朽神 朽

646 淺香、**鶴羣** 淺香神 淺香

647 度鶴度 **杏** 度 **羣** 度 鹿

648 **神** 頭書有リ (貞丈按是ヨリ以下假名書
ノ文ハ皆山田尼ノ説ナルヘシ)

649 ちむ神 ちむ

650 ハちす **鶴**、(は) ちす 如本

651 **神** ハちす **かす** **鶴** **かす** **神** 如本

652 きく神 きく

653 はな神 はな

654 か神 か

655 けれと神 牛 けれと

656 うし神 うし

657 矢 **杏岩** **タ** **神** 矢

658 いと神 いと

659 あし神 あし

矢ヲ前ニ記

安息⁹¹²

本草云其味辛⁹¹³苦⁹¹⁴平⁹¹⁵无⁹¹⁶毒⁹¹⁷主⁹¹⁸心腹惡氣

督⁹¹⁹疑云安息香堅於石蜜者今案有云

悉香者是今安息香鬘耳
此香はたきもの、かれはみてからのやう
にそあり⁹²⁰

楓香脂⁹¹⁹

一名白膠香⁹²¹ 五月斫樹為坎
十一月採脂⁹²²

艾納⁹²³

本草云味甘温無毒去惡氣殺蟲

松木皮上緣衣名艾納合香中用之取之

其形如太糸長四五寸許如蘭花干枯之物
黏着其筋上方着松樹之蔦也今拾其

說相似之云々

甲香⁹²⁴

一名流螺南州異物志云可合衆香燒之

便益芳獨燒之則臭⁹²⁵

龍腦

本草云其味辛⁹²⁶苦⁹²⁷微寒出波津國形似白

松脂作杉木氣明淨者善久經風日或如雀

矢者不佳云合梗灰相思子貯之不耗云々

青木香⁹²⁸

本草云味辛温无毒葉似羊蹄而長大花

(78ウ)

(78オ)

(77ウ)

- 678 よきは羣⁹²⁹よきハ神⁹³⁰よきは
- 677 つく神⁹³¹つく
- 676 ちりはみ羣⁹³²ちりはミ神⁹³³ちりはみ
- 675 つく羣⁹³⁴春⁹³⁵神⁹³⁶つく
- 674 かすに神⁹³⁷かすに
- 673 も鶴⁹³⁸て神⁹³⁹て
- 672 つく神⁹⁴⁰つく
- 671 神⁹⁴¹はたけすて、鶴⁹⁴²杏岩⁹⁴³はたけすて、
- 670 など神⁹⁴⁴など
- 669 ちたる神⁹⁴⁵くちたる
- 668 神⁹⁴⁶わりをれ
- 667 神⁹⁴⁷つ、神⁹⁴⁸つ
- 666 神⁹⁴⁹くさき神⁹⁵⁰くさき
- 665 神⁹⁵¹かうはしき羣⁹⁵²かうハしき
- 664 かた⁹⁵³杏岩⁹⁵⁴かた⁹⁵⁵神⁹⁵⁶かた⁹⁵⁷
- 663 か⁹⁵⁸神⁹⁵⁹か
- 662 わらあくた神⁹⁶⁰わらあくた
- 661 をとり杏岩⁹⁶¹おとり神⁹⁶²をとり
- 660 むけ神⁹⁶³むけ⁹⁶⁴

也炮炙論云於石臼木杵擣勿令犯鐵用之

(80才)

69
鴈
[鶴]
過 **[羣]**
鴈
[杏]
[岩]
鴈
過下文二見 **[和]**
鴈

698 遇鶴遇羣過神遇

た、のかうふしははまふてといふ物のや
うにてちひさし甘松のふしなり

茅香^茅

本草云茅香花味苦温無毒止嘔吐六月

採唐人說魂^新論之^新口雪山之砌多生此草

所謂吉祥草忍辱草芳是也當朝雖

有此草其氣不似被香者也

白朮香

本草云其味苦甘温無毒主風寒温痺

除熱消食二三八九月採根^新曝乾^新

刑部卿範兼卿奉勅抄集之也

長寛三年二月廿六日書写之

裏面両方校合了

(80ウ)

(81オ)

(81ウ)

699 波鶴^新杏岩^新濂^新羣^新漣^新神^新流^新

700 酢^新杏岩^新（無し）

701 升熬合^新杏岩^新升、熬合^新神^新 升熬合^新

702 裏純^新鶴^新裏純^新杏^新裏純^新岩^新裏、純^新

羣^新裏純^新神^新裏^新純^新

703 煖^新鶴^新緩^新岩^新後^新神^新煖^新

704 又^新俣如前法也^新岩^新又^新如前法也、

705 必^新鶴^新如^新

706 脛^新鶴^新羣^新脛^新杏岩^新脛^新神^新脛^新

707 換^新鶴^新根^新神^新換^新

708 脛^新鶴^新脛^新杏岩^新脛^新羣^新脛^新神^新脛^新

709 淹^新神^新淹^新

710 脛^新鶴^新脛^新杏岩^新脛^新羣^新脛^新神^新脛^新

711 享^新鶴^新享^新杏岩^新羣^新厚^新神^新享^新

712 鶴^新杏岩^新ここに「或五周」有り

713 成^新鶴^新羣^新或^新

714 女^新菊^新羣^新麴^新

麴^新 一字誤ニテ二字トス

神^新女^新菊^新

715 和名加^新 和名加^新 牟多知^新 神^新

716 手^新鶴^新午^新杏岩^新羣^新年^新神^新手^新

756 多鶴分 757 膏神膏 758 蓋神蓋 益
759 茂鶴茂 茂杏岩茂
羣發神羣、
760 皆神皆 761 雁神雁 762 法神法 法
763 物神物 764 乃鶴杏岩は羣ハ
765 いと神いと いと
766 しとやか神しと しとやか
767 ふるく神ふるく ふるく
768 もし神もし 769 にて神に にて
770 しる神しる
771 かるくて口に神かるくて かるくて。口に
772 ここに「かるくもあらずあたらしくよきはく、みるに」無し
鶴杏岩有有 羣有有 (辛もあらずあたらしくよきはく、みるに)
773 かうはし花と神かうはし 花と
774 まろ神まろ 775 くき神くき くき
776 り杏岩杏岩 777 え鶴く杏岩杏岩 ょ
778 す杏岩杏岩 す 779 やをら神やをら やをら
780 つきて神つきて つきて
781 ふるはれ神ふるはれ ふるはれ

782 神 ここに左記の三行有り

本草綱目釋名曰梅檀集解時珍香譜云皮實而色（改行）
黃者爲黃檀皮潔而色白者爲白檀皮腐而色紫者爲紫檀
（改行）其木並堅重清香而白檀尤良

783 梅檀 神 梅檀 784 き 神 き

785 つく 神 つく

786 切名衆 鶴 切名（茂叢） 杏岩 羣 兼名苑

神 切名衆

兼歟 苑歟 和名抄引兼名苑

787 奥 鶴 員

788 微温 神 微温

789 主 鶴 差 岩 差 神 主

790 療 鶴 差 岩 差 神 主

791 單 神 早 神

792 滴乳香 神 滴乳香

793 如本 杏 岩 差 神 差

羣 差 神 差

794 しろき 神 しろき

795 ましり 神 ましり

796 きハミ 神 きハミ

797 いし 神 いし

798 神 など 799 えり 神 えり

800 つく 神 つく

801 不 神 不 神 不 神 不 神

802 座 神 座 神 座 神 座 神

803 座 神 座 神 座 神 座 神

804 尖彈脬 落 神 尖彈脬 落 神

805 脬 神 脬 神 脬 神 脬 神

806 脬 神 脬 神 脬 神 脬 神

807 脬 神 脬 神 脬 神 脬 神

808 大獸驚心 神 大獸驚心 神

809 破 神 破 神 破 神 破 神

810 擊破 神 擊破 神 擊破 神 擊破 神

811 凡 神 凡 神 凡 神 凡 神

812 使 神 使 神 使 神 使 神

813 用當子日開之不用 苦納 研用

814 用當子日開之不用 苦納 研用

815 用當子日開之不用 苦納 研用

816 羣 當門子尤妙以由子日開之不用 苦納 研用

用 當門子尤妙以由子日開之不用 苦納 研用

817 神 用子日開之不用 苦納 研用

818 さかう 神 さかう

819 かしり 神 かしり

820 かは 神 かは

821 茶碗 神 茶碗

822 茶碗 神 茶碗

823 茶碗 神 茶碗

824 茶碗 神 茶碗

825 茶碗 神 茶碗

826 茶碗 神 茶碗

827 茶碗 神 茶碗

828 茶碗 神 茶碗

829 茶碗 神 茶碗

830 茶碗 神 茶碗

831 茶碗 神 茶碗

832 茶碗 神 茶碗

833 茶碗 神 茶碗

834 茶碗 神 茶碗

835 茶碗 神 茶碗

831 ちいさく **神** ちあさく832 まさなき **神** まさなき833 たとひ **神** たとい834 なれ もちる **神** なれ もちる835 くふもの **神** くふもの836 あれ **羣** あむに **神** あれ837 いたく **神** いたく **神** つき839 あら **神** あら **神** か841 うす **神** うす842 くちなは **神** くちなは843 かは **神** かは **神** はらひ845 おき **杏** ひき **羣** 、(を) **き**846 うつせ **神** うつせ **神** か848 ます **神** 増 **神** 共 **神** は **神** は850 くらほう **神** くらほう851 よし **神** よし **神** よく852 いれたる **神** いれたる853 麝香 **神** 麝香854 似糖 **神** 似糖855 交廣 **神** 交廣856 淳 **神** 源857 柘 **羣** **神** 柘858 矢唯輕者 **神** 矢唯輕者859 せむたう **神** せむたう860 かたい **神** かたい861 しほ **神** しほ862 うすひら **神** うすひら863 ある **杏** **神** のる864 煎しとりてつく **神** 煎したる蜜に和合して乾しとりてつく865 はなはた **神** はなはた866 かきかたし **神** かきかたし

867 嶺南者有實似山豆

868 不堪噉之 **神** 不堪噉之869 する **神** する870 はしかみ **神** はしかみ871 きくちは **神** きくちは872 め **神** め873 西域 **神** 西域874 云 **杏** **神** 云、875 師子 **神** 師子876 矢 **神** 矢877 獅子 **神** 獅子878 矢 **神** 矢879 貴之 **神** 貴之880 云々 **神** 云々881 疑 **神** 疑882 玉壺丸 **神** 玉壺丸

883 嶺南者有實似山豆

884 嶺南者有實似山豆

885 嶺南者有實似山豆

886 嶺南者有實似山豆

887 嶺南者有實似山豆

888 嶺南者有實似山豆

889 嶺南者有實似山豆

890 嶺南者有實似山豆

891 嶺南者有實似山豆

892 嶺南者有實似山豆

893 嶺南者有實似山豆

- 883 送鶴送 雁雁 杏遠岩○ 羣○ 送神送 送送
- 884 荊安草或本刈 或本無此字 杏岩○ 羣○ 荊安草
- 885 主神主 主主
- 886 卒神卒 卒卒
- 887 心腹脹満○ 神○ 心腹○ 脹満○
- 888 叢神叢 叢叢
- 889 姑臧神姑臧 姑臧
- 890 神ここに左記の二行有り 綱目日時珍曰産於川西松州其味甘故名（改行）
金光明經謂之若彌抄
- 891 ね神ね ねね 892 つち神土 つち土
- 893 やをら神弱 やをら弱 894 つく神春 つく春
- 895 すき神透 すき透 896 か杏岩羣 羣羣
- 897 さは杏岩羣 さし神爽 さは爽
- 898 かはらけ神味 かはらけ味
- 899 たち神神 たち神 900 そ神そ そ神
- 901 二朝二朝 二朝二朝
- 902 含鶴含 食食 羣○ 羣○
- 903 其樹神丁子香樹也 其樹其樹
- 904 核神核 核核
- 905 交愛交愛 交愛交愛
- 906 日鶴日 日鶴日
- 907 長秀神唐僧也見于上 長秀長秀
- 908 乍鶴○ 下○ 杏○ 乍○ 岩○ 乍○
- 909 于鶴神于 羣○ 干○ 杏○ 于○
- 910 二朝二朝 二朝二朝
- 911 妻神妻 妻妻
- 912 神ここに左記の三行有り 本草綱目集解曰安息香出西域狀松脂黃黑色爲魂新者
亦（改行）予鶴瑞日生南海波斯國樹中脂也、狀著○ 膠
秋月采之文曰（改行）機曰或言燒之能聚鼠者爲眞
- 913 幸神幸 幸幸
- 914 无神无 无无
- 915 主神主 主主
- 916 から々神辛 から々辛
- 917 やう神やう やうやう
- 918 あり神あり ありあり
- 919 神ここに左記の三行有り 本草綱目集解曰楓香脂所在大山中皆有之頌曰今南
方（改行）及關陝甚多樹甚高大似白楊葉圓而作岐有
三角而香二月（改行）有花白色連著實大如鴨卵八九
月熟時暴可燒
- 920 脂神脂 脂脂
- 921 神左記の三行有り 本草綱目卷廿一章部香類桑花之下附艾納時珍曰艾納
生老松樹上（改行）綠苔衣也一名松衣和合諸香燒之
煙清而聚不散則有艾納香與此木（改行）同
- 922 綠衣神緑苔衣 緑衣緑苔衣
- 923 名艾納神名艾納 名艾納名艾納
- 924 糸神糸 糸糸
- 925 着神着 着着
- 926 着神着 着着
- 927 於杏岩按 於杏岩按
- 928 神ここに左記の四行有り 本草綱目釋名曰流螺假諸螺（改行）麝名甲香集解曰
生南海今嶺（改行）外閩中近海州群及明州皆有（改
行）之

929 神 ここに左記の頭書九行有り

貞丈按つく草云(改行)甲香ハほら貝乃やう(改行)なるがちいさくて(改行)口乃ほどのほそなが(改行)にしてでたる貝乃(改行)ふたのり武蔵国(改行)金(改行)沢と云浦に在しを(改行)所の者ハへなた(改行)りと(改行)申侍るといひし

930 南州異物志 神 南州異物志

931 可合衆香 神 綱目二難衆
可合衆香 其解綱目

932 益 神 益

933 臭 神 臭

934 辛 神 辛

935 合梗灰 神 糯米炭
合梗灰 糯米炭 綱目修治日一

936 耗 神 耗

937 神 ここに左記の三行有り

本草綱目釋名曰時珍曰木香類也本名蜜香因其香氣如蜜也祿(改行)沈香中有蜜香此木香爾昔人謂之青木香後人因呼馬鈴(改行)根爲青木香乃呼此爲南木香廣木香以別之

938 正 神 正

939 辛 神 辛

940 作 神 作

941 一名 神 一名

神 一名 杏岩 一名 羣 (無し)

942 一名 神 一名

羣 一名 杏岩 一名

943 苻離 神 苻離

944 沢芳 神 沢芳

945 生河東川谷可澤 神 生河東川谷可澤

946 神 ここに左記の三行有り

本草綱目集解曰志曰零陵香生零陵山谷葉如羅勒南越草即此 志云人名 改行 燕草又名蕝草即香草也山海經蕝

947 陽 神 陽

948 莖 神 莖

949 陶云 神 陶云 杏岩 羣 陶云

950 箇桂 神 箇桂

951 箇薰 神 箇薰

952 梯 神 梯

953 中 神 (無し)

954 臭氣 神 臭氣

955 友 神 友

956 豆 神 豆

957 羣 神 羣

958 臭氣 神 臭氣

959 一名 神 一名

960 一名 神 一名

961 藥 神 藥

962 神 ここに左記の一文有り

963 憂 神 憂

964 茅 神 茅

965 止 神 止

966 嘔吐 神 嘔吐

967 硯 神 硯

968 品 神 品

- 976 975 974 973 972 969
- 神 神 杏 曝乾 食 无
- 裏面両方校合了 裏面両方校合了 ここに頭書「按二條院御代長寛三 曝乾 食 无
- 年即永萬元年」有り 年即永萬元年」有り 年即永萬元年」有り 年即永萬元年」有り 年即永萬元年」有り 年即永萬元年」有り
- 977 976 975 974 973 969
- 鵲 杏 岩 鵲 杏 岩
- ここより上下両巻の裏書勘物記載 ここより上下両巻の裏書勘物記載 ここより上下両巻の裏書勘物記載 ここより上下両巻の裏書勘物記載 ここより上下両巻の裏書勘物記載 ここより上下両巻の裏書勘物記載
- 左記の藤原範兼伝有り 左記の藤原範兼伝有り 左記の藤原範兼伝有り 左記の藤原範兼伝有り 左記の藤原範兼伝有り 左記の藤原範兼伝有り
- 男中納言貞嗣五孫山井三位永頼（改行）巨勢麻呂十三 男中納言貞嗣五孫山井三位永頼（改行）巨勢麻呂十三 男中納言貞嗣五孫山井三位永頼（改行）巨勢麻呂十三 男中納言貞嗣五孫山井三位永頼（改行）巨勢麻呂十三 男中納言貞嗣五孫山井三位永頼（改行）巨勢麻呂十三 男中納言貞嗣五孫山井三位永頼（改行）巨勢麻呂十三
- 從四位上季綱子友實（改行）從四位下其子從五位下學頭 從四位上季綱子友實（改行）從四位下其子從五位下學頭 從四位上季綱子友實（改行）從四位下其子從五位下學頭 從四位上季綱子友實（改行）從四位下其子從五位下學頭 從四位上季綱子友實（改行）從四位下其子從五位下學頭 從四位上季綱子友實（改行）從四位下其子從五位下學頭
- 子能兼藏人式部少輔（改行）從四位下其子從五位下學頭 子能兼藏人式部少輔（改行）從四位下其子從五位下學頭 子能兼藏人式部少輔（改行）從四位下其子從五位下學頭 子能兼藏人式部少輔（改行）從四位下其子從五位下學頭 子能兼藏人式部少輔（改行）從四位下其子從五位下學頭 子能兼藏人式部少輔（改行）從四位下其子從五位下學頭
- 近江權守大學頭東宮學士式部小輔（改行）從五位下其子從五位下學頭 近江權守大學頭東宮學士式部小輔（改行）從五位下其子從五位下學頭 近江權守大學頭東宮學士式部小輔（改行）從五位下其子從五位下學頭 近江權守大學頭東宮學士式部小輔（改行）從五位下其子從五位下學頭 近江權守大學頭東宮學士式部小輔（改行）從五位下其子從五位下學頭 近江權守大學頭東宮學士式部小輔（改行）從五位下其子從五位下學頭
- 月五日卒五十四和哥童蒙抄撰者 月五日卒五十四和哥童蒙抄撰者 月五日卒五十四和哥童蒙抄撰者 月五日卒五十四和哥童蒙抄撰者 月五日卒五十四和哥童蒙抄撰者 月五日卒五十四和哥童蒙抄撰者

『蕉集類抄』編者と成立の背景について

『蕉集類抄』諸本の上下巻末それぞれに置かれた識語には、本書の編者と成立背景を伝える次の記事が共通して残されている。

・ 上巻末識語

刑部卿範兼卿奉 勅抄集之也

裏面共校合了

・ 下巻末識語

刑部卿範兼卿奉 勅抄集之也

長寛三年二月廿六日書寫了

裏面両方校合了

右によれば、本書は「刑部卿範兼卿」が奉ったもので、勅により之を抄集した、とある。「卿」という尊称が付さ
れていること、下巻の「長寛三年二月廿六日書寫了」なる識語が見えることから、原本は「長寛三年二月廿六日」以
前に成立したと見られることから、遅くとも江戸中期迄には平安末期の公卿藤原範兼（一一〇七—一二六五）の撰と
考えられていた。京都の村井古巖が献納した神宮文庫本下巻末には、同様の趣旨により範兼の伝を集成した次の注が
残されている。

範兼卿其先左大臣武智麻呂第四子參議巨勢麻呂十三男中納言貞嗣五孫山井三位永頼

四代大學頭從四位上季綱子友實本名保實勘解由次官從五位下其子能兼藏人式部小輔

從四位下其子範兼佐渡近江權守大學頭東宮學士式部小輔刑部卿從三位母兵部小輔爲賢

女也崇徳院御宇保延五年乙卯三月五日卒五十四和歌童蒙抄抄撰者

(朱筆 神宮文庫所蔵本 81丁ウ)

「寂蓮自筆本」なる伝本が存在したことを受け、近現代以降は寂蓮法師編纂の書とする解題や目録も一部見られるが、前掲の上下巻末識語を尊重し、一般的には藤原範兼が編者と考えられている。^(注)

藤原武智麻呂から範兼に至る右の家伝は、範兼母の「高階」の姓が省かれる点や、末尾に「和歌童蒙抄」編者であることが記されるといった違いを除き、おおよそ「尊卑文脈」所掲の系図と傍注に一致するが、範兼の編著と云われる「和歌童蒙抄」にも同様に「尊卑文脈」に基づく範兼伝を示す伝本があり、^(注)そちらを参考にしたとも考えられる。

範兼の没年については二説が行われ、一つは「公卿補任」が記す長寛三年(一一六五年・六月五日「永万」と改元四月二十六日薨去説、いま一つは「尊卑文脈」の保延五年(一一三五)三月五日の薨去説であるが、後者は、同じく分脈中に範兼父とされる藏人式部小輔從四位下藤原能兼も同年に範兼と同じ五十四歳で亡くなったと見えるため疑わしく、近年では前者を範兼没年月日と見るのが一般的である。

武智麻呂以下の藤原南家貞嗣流の能兼を父に、高階爲賢女を母に嘉永二年(一一〇七)に生まれた範兼は、久寿二年(一一一五)四十九歳の時、時の東宮雅仁親王(後の後白河天皇)に東宮學士として仕えたが、同年七月二十四日、東宮は帝に即位し、範兼は翌年大學頭に換えられている。後白河院政期にあたる二条天皇御世の応保二年(一一六二)、五十六才の時刑部卿となり、翌年正月五日には刑部卿のまま從三位に叙された。^(注)この年の三月二十九日、年号は天変により「長寛」と改元されたが、これを勘えたのは範兼であったと云われる。大學頭の任を離れた後も、当代を代表

する儒者として朝廷からの篤い信望に与つていたことを伺わせるが、二年後の長寛三年（一一六五）二月一日に出家し、同年四月二十六日、五十九才で亡くなつてゐる。^(注5)

儒者として一代を成した範兼は、前述の『和歌童蒙抄』だけでなく、『五代集歌枕』等複数の書を撰集した歌学者であり、二条院歌壇を中心に活躍した歌人でもあつた。大治五年（一一三〇）二十三才で殿上藏人歌合に出詠、以後は保延元年（一一三五）二年藤原家成家歌合、応保二年（一一六二）二条院中宮育子員合に歌人として列した他、二条院内裏百首や同艶書合にも歌を献じた。『千載和歌集』等の勅撰集に二十首入集し、平安末期の最も有力な勅撰歌人の一人であつたと考えられている。^(注6)

範兼は、東宮時代から後白河天皇の学問を支え、その信任に適つたが、後白河天皇長子で次の帝となつた二条天皇からは、特に歌の才を認められ、近臣の一人としてその方面で重用された。天皇は様々な歌学書を召したが、その中に『和歌童蒙抄』も含まれたといふ。^(注7)『奥義抄』をはじめとした先行する歌学書の業績を集成し、辞書形式で歌語の註解が行われる同書は、元永元年（一一一八）から大治二年（一一二七）頃の成立と推定されている。^(注8)宮内庁書陵部本の識語や上覚の『和歌色葉』、順徳天皇の『八雲御抄』に云われる通り、『和歌童蒙抄』を範兼撰と見なせば、範兼はこの頃弱冠二十歳前後である。「童蒙」というには年長だが、撰集当時の範兼とは同年代の二条天皇の学問にとり、適切かつ効果的な内容と考えられたのであらう。

この範兼が薫物指南書抄集の勅を賜るには、以上のような儒学の才と歌学書編纂の実績だけでなく、薫物の方面でも当代随一の知識を誇り、或いはそうした知識を伝える家の人でもあつたことが想像される。源公忠や藤原公任がそうであつたように、有力な歌人に薫物の名人は少なくない。薫物が歌合の場に於ける構成要素の一つとされていたこと^(注9)も、彼らと合香との関わりを強めた一因であらうが、先祖の業績や家族からの影響も考慮されるべきである。範兼

は公忠の合香の説を伝えたという源経信の孫に当たる女性を妻にしていた。この妻とその生家から公忠家を主軸とした合香の説を得たとも考えられる。

『薫集類抄』の主要な特徴は、倭人にとって親しみやすく整然とした構成のもと、有力かつ必要最低限の説を引くことにより、合香の初心者への理解と精進を助ける書としての機能が備わるところであろう。本書撰集の勅命を下した主上について、一人に絞って推定されたことはなかった。筆者は、本書の性格と範兼との繋がりの強さから推して、二条天皇の勅による撰集だったのではないかと思うが、上下巻とも範兼の責任に於いて完成したかどうかは疑問である。

上巻が「四条大納言」を一貫して源定と解し、滋野貞主と本康親王の間に配し、同じ号で呼ばれた後代の藤原公任を「公任卿」と記して区別していたことに対し、下巻の「四条大納言」は東三条院藤原詮子の後、藤原成子、山田尼の前という、花山、一条朝を中心に活躍した藤原公任と認められる位置に配されており、本書を現在伝わる形に編纂した人物が複数あった可能性を想像させる。

『薫集類抄』最初の伝本と云うべき長寛三年二月二十六日書写本は、実に範兼出家の十五日後に完成している。範兼の出家と前後して書写が開始されたこととみて間違いなからう。範兼の出家が体調不良に依るらしきことは、彼がそれから間もなくしてこの世を去ったことから推察されるが、『薫集類抄』の完成が二条朝であり、範兼最晩年のことであつたと仮定すれば、上下巻の間に認識の相違が生じた背景について、次のような説明も可能であろう。

範兼は、我が国に於ける合香の歴史をまとめ、諸説を分かりやすく指南する為の抄物の撰集を二条天皇に命じられ、歌学書撰集の実績をも生かし、我が国独自の薫物指南書の完成を目指したが、次第に体調を崩し、撰集を信頼できる身近な人物に任せ、完成すると形ばかりの献上を果たし、即日出家したのではないだろうか。

範兼が晩年その完成に力を注いだ『薫集類抄』だが、それが二条天皇の合香活動に貢献することは殆ど無かったようである。二条天皇は範兼薨去の二ヶ月後、長寛三年六月に体調を崩し、翌月二十五日、讓位の直後に二十三歳という若さで崩御した。本書の名称が完成時からのものであるかを知らせる資料は見えず、献上されたはずの禁裏の蔵書目録中にも、『薫集類抄』なる書名はおろか薫物資料らしき文献名は皆無である。編者範兼の出家と死、勅を下されたと思しき二条天皇の夭折という不運の連続が、勅抄集として精密に完成され、守り伝えられるはずだった本書の運命を一変させたのではないだろうか。

〈注〉

〔注1〕 新校群書類従本解題〔新校群書類従解題集〕所収（昭四）『市立名古屋図書館別置図書目録』

〔昭48〕『杏雨書屋蔵書目録』（昭五七）参照。

〔注2〕『神宮文庫図書目録』（大一一）、『群書解題』（昭三七）、『関西大学所蔵岩崎美隆文庫五弓雪窓文庫目録』（昭五一）、『国書総目録補訂版』（平一一三）、『古典籍総目録』（平一二）、『立命館大学図書館蔵西園寺文庫目録』（平一二）参照。

〔注3〕 国文註釈全書所収本（底本は屋代弘賢旧蔵。岡本保孝本、紀州徳川家本をもって校合）冒頭には、『尊卑文脈』からの抄出と思しき狩谷棧斎本所掲範兼系譜が引かれる。

〔注4〕『一代要記』後白河天皇長寛元年条参照。

〔注5〕『公卿補任』『尊卑文脈』、橋本不美男氏『王朝和歌史の研究』参照。

〔注6〕『平安王朝歌合大成増補新訂』四、『和歌大辞典』参照。

〔注7〕『和歌大事典』参照。

〔注8〕 佐佐木信綱氏『日本歌学体系 第一卷、川瀬一馬氏「古辞書概説」、山田洋嗣氏「和歌童蒙抄の形成」』（立教大学日本文学）（昭五九 七月号）、同氏「和歌童蒙抄の注釈」（『和歌文学研究』昭五九 九月）参照。

〔注9〕『平安朝歌合大成増補新訂』五参照。

〈訂正〉本稿では、西園寺文庫本の特徴を論じる予定だったが、四天王寺国際仏教大学図書館恩頼堂文庫蔵本との比較検討が十分行えなかったので、別の機会にこれを行うこととし、ここでは右の考察と左の追補に代えた。

〈追補〉平成十六年二月九日、四天王寺国際仏教大学恩頼堂文庫蔵本（以下「恩頼堂文庫本」）の閲覧、複写並びに撮影をお許し頂いた。和装袋綴じの上下二冊からなる恩頼堂文庫本中には、「園林文庫」の蔵書印が存するほか、下巻末には底本を伝寂蓮本、書写者を「清茂」と記す識語が見える。この識語の内容と、丁毎の内容と字数、行数の相似から、河村文庫本の底本となった岡本清茂書写本に関係する伝本と考えられる。但し、「清茂」なる署名の筆跡は書写者（ならびに清茂本人）のそれに似ず、また、以下に示した通り、恩頼堂文庫本中の異同は、河村文庫本を除く同じ伝寂蓮本系統の諸伝本に独自の異同に共通する場合が少なくない。

恩頼堂文庫本には、「六条御殿小仲居御役人中様」宛に書かれた貸借に関わると思しき覚書一枚等が付随して伝わる。恩頼堂本そのものの特徴や伝来の経緯だけでなく、『蕉集類抄』の享受史と諸伝本の系統を検討する上で不可欠な資料を備えた伝本である。

本稿では、恩頼堂文庫本上下巻中に存する他本との異同を示す予定であったが、紙面の関係上、以下の条件の下に異同の一部を示す。

一 恩頼堂文庫本の翻刻は前稿で示した凡例に従った。

一 河村文庫本と一致せず、他本に共通する異同については前稿と本稿の脚注番号を、諸本間で恩頼堂文庫本に独自の異同については※につづけて丁数、裏表面の別、並びに行数に続けて示した。例外も存する。

・ 恩頼堂文庫本に独自の傍注、句読点ならびに記号は、異文と認められる場合に限り追補の対象とした。

・前稿と本稿で脚注の対照とした神宮文庫本独自の傍注に共通する傍注は、紙面の都合により集成を避けた。
 一 恩頼堂文庫本の略称は「恩」とした。

* * * *

1 蕉集類抄全 [古] 恩 蕉集類抄上 / 7 印 [杏] 岩 羣 恩 印 / 8 副 恩 副 / 15 寸 [古] 鶴 [杏] 岩 恩 可 / ※ 上 5 丁ウ 2 行 「一朱」 ↓ 「〇朱」 / 19 「三」 有り [杏] 岩 恩 無し / 39 城子 [古] 杏 岩 恩 城子 / 58 二分三朱 恩 三分三朱 / ※ 上 11 丁ウ 4 行 「甲香三両」 恩 無し / 70 二分 恩 三分 / 79 寸 恩 す / 80 一分三朱 [杏] 岩 恩 一分三朱若二分 / ※ 上 14 丁ウ 1 行 恩 よへ 94 一分或二分 恩 一分或二分 / ※ 上 18 丁ウ 4 行 「為巧合」 ↓ 恩 「為〇合」 / 102 下 恩 有り / 104 連 恩 連 / 120 連 恩 連 / 127 大 恩 大 / 128 三 恩 三 / ※ 上 27 丁 4 行 恩 ここに注 136 [杏] 岩 恩 同じ書入れが押紙に記載、添付 / ※ 上 31 丁ウ 6 行 「大」 ↓ 恩 無し / 223 或 恩 或 / 233 周 [杏] 田 岩 恩 田 恩 田 / ※ 上 37 丁オ 2 行 「看」 ↓ 恩 「者」 / 251 土 神 [杏] 岩 羣 恩 土 / 252 亦 [岩] 二 (頭書「ろ」) 恩 二 / 253 恩 ここに [岩] の書き入れ 「草茅香」 以下と同じ二行有り (傍注は [岩] と異なる) / 264 裏面共梗合了 [杏] 岩 羣 恩 裏面共梗合了 / ※ 下 42 丁 オ 2 行 「長寧」 ↓ 恩 「長宣」 / 270 邪王家 恩 邪王家 / 382 ハたく [岩] たく 恩 たく / ※ 下 53 丁ウ 7 行 「擣」 ↓ 恩 「猶」 / 481 わろく [杏] 岩 恩 わろけ / ※ 下 54 丁ウ 「に」 ↓ 恩 「と」 / 493 又 [杏] 岩 恩 み / 505 打 恩 於 / 515 葦帚 恩 葦帚 / 533 可 [杏] 恩 少可 [岩] 少レ可 / 561 さまして [神] 杏 岩 羣 恩 さまして / ※ 下 58 丁ウ 「に」 ↓ 恩 「そ」 / 650 ハちす [鶴] 恩 はちす / 651 かす [鶴] 恩 かす / 673 も [神] 杏 岩 羣 恩 も / 690 にも [神] 杏 岩 恩 にも / 698 遇 [杏] 岩 恩 遇 / 705 必 [神] 杏 岩 羣 恩 必 / ※ 下 67 丁ウ 5 行 「伏」 ↓ 恩 「佐」 / 719 栗 恩 尤 / 741 等 恩 如 / 749 與 恩 与 / 750 豆 [杏] 岩 恩 定 / 754 公宗 [杏] 岩 恩 土家 恩 土家 / 756 多 [神] 杏 岩 羣 恩 多 / 826 かきまする [杏] 岩 恩 かきまひる / 827 ことの [神] ことの 恩 ことの / 858 矣唯輕者 [杏] 岩 恩 矢唯輕者 / 863 ある 恩 める / 884 或本此字

恩 或本此字 或本此字 908 年 [杏] 乍 [神] 羣 恩 乍

〈前稿の訂正〉

1 4頁8行「延宝二年（一六七四）書寫了」↓「延享二年（一七四五）書寫了」
2 上卷翻刻22丁才1行「又薫衣香」↓「又云薫衣香」